
黒竜の愛娘

ひよこ豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒竜の愛娘

【Nコード】

N4138P

【作者名】

ひよこ豆

【あらすじ】

黒竜と人間のハーフであるアキは、人間である母の思いつきで突然人間の世界へ行くことになる。人生の選択肢を広げるための生活で、アキはなにを学んでいくのか。

学園ものだったり、主人公が異様に強かったり、過保護なキャラクターが多かったりと見辛い部分はありますが、目についたらちよつとのぞいてやってください。

1) 旅立ち

大陸の中央からすこし東によったところに、大きな湖と深い森、そして見上げて頂上が見えない程高い岩山がある。人々からは、聖地とも魔窟ともよばれている場所だけど、私にとっては、ホームだ。

いつも通り、湖の近くでとれる果物をかご一杯に詰めて、友達を呼ぶ。

「ハクスイ！」

真っ白な竜は、産まれたときからずっと一緒にいる友人であり、姉である大切な存在だ。

「アキ、もう終わったの？」

「うん、終わった。」

純白の美しい竜から、20前後の美しい女性になる。白竜は総じて髪は白く、目は紫だ。美形が多い竜の中でも、ハクスイは美人さんなのだと言っていた。

「今日は私の誕生日だから、早く帰っておいでって言われてるの。大切な話があるんだって。」

「じゃ、ちょっと急ぎましょうか？」

「お願い。」

ぶわっと空気を巻き上げ、彼女はまた美しい竜の姿になる。私は彼女の背に飛び乗り、我が家である岩山の頂上へあがっていく。背中の中程まで伸ばした髪の毛が風で舞い上がり、顔の周りを煩く飛び回るのを、片手で押さえる。宙を舞う色は、漆黒。たまに、ハクスイの綺麗な白い髪をうらやましく思っているのは内緒だ。見上げて頂上が見えないと言われている岩山も、竜の翼をもつてすれば一瞬の距離。あつというまに目的地につくと、彼女はまたねと言いつつ空に消えていった。ありがとう、と声を風に乗せれば竜の歌が遠くから聞こえる。

「誕生日おめでとう、か。ふふ、ハクスイありがとう。」

今日はアキの14歳の誕生日だ。人の世界では成人を迎える年。大人になったんだと思うと、くすぐったいような、誇らしいような気持ちになる。

「お母さん、お父さん、ただいま帰りましたー！」

かご一杯の果物を抱え、我が家に入ると、なぜか満面の笑みを浮かべた母と、泣きはらしたような顔をした父がいた。

「おかえり、アキちゃん。」

少女のような悪戯っぽい笑顔の母親はよく見るので良いのだが、奥で憔悴しきっている父はいつたいたというのだろう。

「ええと、ただいまお母さん。あの、お父さんどうしたの？」

ふふ、と含み笑いをする母は娘の自分から見ても可愛らしい。可愛らしいが、母がこの顔をしているときは、大概ろくなことが起きな

いというのを、短い人生の中で学習していたアキは、背筋に嫌な汗が流れていくのを感じた。

「お父様はね、ちょっと子離れが出来ないみたいなのよ。心配性よね？アキちゃん、もう14歳になるのにねえ。」

私から果物のかごを受け取ると、代わりにというかのように、胸程もある大きなトランクケースと、美しい光沢を放つ黒いガラスをモチーフに使ってあるネックレスを渡された。

「・・・お母さん、これはなに？」

「アキちゃん、人間のお友達いないでしょう。こんな岩山に住んでいたら仕方ないけど、やっぱり、半分人間の血が流れているんだから人間の世界も知っていないとダメなんじゃないかしらってお母さんは思ったの。だから、せつかく成人する年になったことだし。人間の世界に行ってみるのも悪くないと思ったのよね。」

二の句が継げないとはこういうことなんだろう。思わずトランクの持ち手をつぶしてしまうところだった。生まれてこのかた14年。確かに、人間の知り合いなんて湖の近くのラゼットおじさんくらいしかいなかったけど、でもいろんな種族に幅広く友人がいる私に向かつて、まるで友達いない子みたいない方はないではないか。

「確かにお父さんが黒竜じゃ普通の人間と仲良くなるのは難しいわよね。あなたもお父さん譲りのすごく綺麗な黒髪に黒い目だもの。そのまま人間の世界におりれば生きたまま捕獲されて、すぐに悪い人たちの餌食だわ。そんなことになるのお母さんは嫌。そこで役立つのがこれ！」

じゃーんつと浮かれている母が手に取ったのは、トランクと一緒に渡されたネックスだっただ。

「これはお父さんの喉もとの鱗を一枚はいでもらった世にも珍しい逆鱗の魔封じなので、その髪の毛と目を人間仕様にしてください！」

そこでようやくお父さんがどうしてあんなに泣きはらした目をしているかがわかった。竜にとって逆鱗をはがされるのは、生爪をはがされるようなものだ。

「お母さん、なんてことを・・・。」

青くなる私を見て、奥からお父さんが駆け寄ってきた。

「いや、いいんだよ。俺はアキが人間の世界で平和に暮らせるなら、鱗の一枚や二枚なんてことないんだ。・・・それより、しばらくアキがそばにいないかと思うと涙が止まらないんだ。」

はらはらとこの世の者ではないかのように美しい顔が涙を流す姿はまるで絵画のようだけど、それが自分の父親だとうつとおしい。

「もう、大げさだなあ。そんな人里におりるって言うても、岩山の麓の街あたりでしょ？すぐ帰って来られるし、そんな長い間降りていなくてもいいんじゃない？」

確認の意を込めてお母さんを振り返ると、ずっと一枚の書類を渡された。そこには、中央魔術学校編入手続き終了届け、とだけ書かれており。また、編入者は必ずこの書類を持参するようにとも書かれていた。

「4年くらいあつたら、友達いっぱいしてくれるでしょう?」

「はあああ!？」

いくらなんでも、人間の知り合いが一人しかいなかった私がいきなり学校はハードルが高いだろう。しかもよりにもよって魔術の学校だ。

「お母さん、無茶言わないでよ。私の魔力と身体能力じゃ、どんなにがんばっても人間から浮いちゃうって。」

鱗はがして泣いているようなお父さんだけど、一応神竜とまで言われるほど力の強い黒竜だ。その血を半分受けている私は、その辺の人間なんて話にならないくらいの力を持っている。それこそ、国一つ殲滅できるくらいの力を。

「いやあね、だから魔封じ持たせてあげるんでしょう?身体能力は自分でごまかしなさい。魔力は、まあ人間にしてはちよつと多めかなくらいになるから。そんな怪しまれはしないわよ。」

ほほほと笑うお母さんも、実は半分人間じゃない。お父さんと血の契約を交わしているから、不老の体なんだ。首をはねとばすか、心臓をつぶさないと死なないのよなんて笑ってたけど、お母さんにそんなことしようものなら私はもちろんだけど、お父さんが黙っていない。

「アキ、あなたは多分、普通の人間よりは長く生きるわ。竜の血を引いているもの。それも、とびきり極上の黒竜の血を。だから、選択肢をたくさん持っていてほしいの。人間の世界は生きにくいけれど、出会いは多いわ。こちらの世界ももちろん居心地は良いけれど、

どちらも見た上で選んでほしいの。お母さんが、お父さんの隣を選んだようにね？」

奥のお父さんが照れて鱗が出ているのは言わないでおいてあげよう。お母さんは、ああやってお父さんが照れているのを見るのがすごく好きらしいから。

「ああ、もちろん辛くなったら帰ってきてても良いのよ？あなたが傷ついたら、国滅ぼしちゃうかもしれないからね、お父さん。」

「かもしれないじゃない。俺のアキを泣かすやつは一族郎党皆殺しだ。」

もう、過保護よお。なんて笑っているお母さんはいいとして、真顔で皆殺しと言い切ったお父さんは間違いなく本気だろう。

さっきとは全く違った意味で青くなりながら、決意を固める。確かに、自分の世界を広く持つておくというのはいいことだ。

「うん、わかった。私、がんばってみる。人間の世界に行ってみる。」

お母さんから受け取ったネックレスを首にかけ、トランクの持ち手をしっかりと握る。すつと体から熱が逃げるような感覚がしたかとおもうと、胸元のネックレスが一瞬熱くなる。

「うん、黒い方がアキちゃんはかわいいけど。茶髪もなかなかいいわねえ。とび色の目もかわいいわあ。」

「アキは何色でも似合う。」

さらりと首筋をなでるかみの毛を一房つまむと、暖かい大地の色をした髪の毛があつた。多分、先ほどの違和感は魔力が封じられたからだろう。

「まずはラゼットのところにいつてみてくれる？そうすれば、学校への行き方なんかを教えてくれると思うから。」

「うん、わかつた。」

「それと。」

するつと顔を寄せて、お父さんには聞こえないように、女同士の秘密の話。

「もし、この人になら本当の自分を見せていいと思つたら見せなさい。真実の愛のもとに、秘密は無粋でしょう？」

にやつと笑うお母さんは、すごく楽しそうだ。ははつと曖昧に笑つてごまかすと、奥でまだ泣いているお父さんの頬と額に。お母さんの頬に、キスを落として、私は慣れ親しんだ住処を後にした。

1) 旅立ち(後書き)

やってしまった、突発作品。もう一つの話がスランプすぎて、全然違うものを書きたくなってしまったんだ！計画性の無い話なので、暇つぶしにのぞく程度にしてみてください。とりあえず、学園までたどり着くことを目標に。

2) 親友と契約と

私の驚異的な身体能力を持っても、さすがにこの岩山はおりられない。いつもは、魔力をフルに使い空を飛んでいたのだが、魔封じがあるからそれもできない。申し訳なく思いながらまたハクスイを呼ぶと、髪の毛と目を見てもものすごく驚かれた。そして、いきさつを説明すると自分もついていくと主張し始めた。

「アキだけでそんま魔窟に行かせられる訳無いでしょう！まだたった14歳よ？ たったの、たったの14歳！！竜の成人は早くても50歳だし、黒竜なら200歳くらいでもかまわないはずなのに、14歳のアキが一人で人間の世界に行くなんて危なすぎるわー！！」

「ハ、ハクスイ……。」

「絶対についていきますからね？」

「えっと。ラゼットおじさんのところまで？」

「まさかっ。学校にもついていくわよ！」

ふんつと鼻息荒く言い切る彼女は両親ばりに過保護だ。しかし、どう考えても彼女が人間の通う学校に行けるはずが無い。白い髪の毛に、紫の瞳で人間と言い切るのは不可能だろうから。

「無理だよ、だってハクスイは人間じゃないでしょう？」

「なによ、アキだって純粋な人間じゃないでしょう。それに、わたしは生徒で入るなんて一言も言っていないわ。契約を結べば良いのよ。」

」

さつと差し出されたのは白く輝く宝珠、ハクスイの力の源だ。竜たちは皆、成人したら宝珠と呼ばれる力の結晶を作る。その宝珠が美しい程、竜の力が強いとされ、また宝珠を持つことで竜自身の力も上がる。ただ、宝珠は唯一無二のもので一度破損してしまえば、その竜の力は半減し、最悪死んでしまうのだ。

「ハクスイ！」

「いいのよ。あなたならわたしの意思を無視した命令なんてしないだろうし、わたしが魔力不足になることも無いわ。魔力を誇る白竜の一族と肩を並べるあなたの魔力ならね。」

「でも、わたしたちは友達でしょう？ そんな、主従関係を結ぶ契約なんて・・・。」

「ばっかね。主従じゃないわ、宝珠をやりとりするのは大切なパートナーだと認めたから。あなたをわたしの親友だと認めたからよ。」

ふふん、と笑う彼女の顔はどこまでも誇らしげで、嬉しそうだ。親友という言葉が口の中でつぶやき、そつと宝珠を受け取る。

「ハクスイ、本当にいいの？」

そつと伺うと、くどいわねつ、と小突かれた。

「わたしハクスイはアキの親友として契約を認める。汝、宝珠を受け取るか？」

凜とした声が場を作る。契約のため、周辺の魔力が集まり、高密度な魔力の空間ができる。わたしはゆっくりと宝珠を握り、ハクスイの魔力に自分の魔力を混ぜる。

「受け取ります。」

キンツと魔力が張りつめきらりと輝いた宝珠が二つに割れる。そして、ハクスイとアキの額に宿り、消えた。

「よし、これでわたしはあなたと契約がすんだわ。」

「・・・何も変わらないね。」

「んー、そうねえ。本当ならわたしの魔力が契約主に行って、契約主がすぐおく強くなったりするんだけど、あなたはもう魔力があるからなにも変わらないのよね。」

「え、じゃあ契約した意味って？」

「わたしがあなたの影に入れるようになったのと、人型をとってもそんなに疲れなくなっただのと、あとは・・・そうねえ。お互いがどこにいるかわかるとか、魔力が切れたらわたしのぶんも魔力が使えるとか・・・。」

「ううん、と二人でうなる。前者二つはありがたいが、後者は今までと変わらないのだ。ハクスイはもちろんアキも竜の血があるので、同族の気配が探れる、そして五感が優れているのでお互いの位置を把握するのは難しくない。魔力も、竜の魔力を宿したアキならばそうそう魔力が切れることが無いのだ。」

「まあ、わたしがあなたのそばに居やすいんだからいいのよ。」

ね？と明るく返されれば、こちらで笑って返すしか無い。強引だが優しい彼女は、きつと不安な自分の心を察してくれたのだろう。ぎゅゅと抱きついて頬にキスをすれば、彼女もキスを返してくれる。竜にとってキスは親愛の情を表す挨拶のようなものだ。

「ありがとね、ハクスイ。」

「いいえ。こちらこそ。・・・さあ、さつさとあのおっさんのところに行かないとね。」

ばさりと翼を広げる彼女の背中に飛び乗り、アキは岩山を降りていく。

2) 親友と契約と(後書き)

百合じゃないです、美しい友情です。女の子同士でハグするのって
おかしいことじゃないですよ？さすがにキスはないですが、べた
べたするのは普通だと信じています。

3) 唯一の常識人「おじさん

ぶわりと風を受け森の木々がしなる。小さな森小屋でお茶を飲んで
いた初老の男性は、待ちかねた訪問者に頬を緩ませる。大きな竜の
気配は彼女の友人だろう。ばたばたとこちらへ駆け寄ってくる娘た
ちのために、彼はお茶の準備を始めた。

「ラゼットさん、こんにちは！」

「邪魔するわよ。」

小屋の中には良い香りが広がっていて、となりのハクスイがこくり
と喉を鳴らす音が聞こえた。この香りは、リンゴの砂糖漬けを焼い
たお菓子だ。

「いらっしやい。アキにハクスイ、待ちかねたよ。」

柔らかいテノールは年を感じさせない艶やかさがある。しゃんと立
つ彼は、実はもう50台後半らしいのだが、しっかり鍛えられた身
体と穏やかな物腰からそんなに年を感じさせない。ちなみに、母は
この人よりも年上である。なんでも昔助けられたらしく、それ以来
ずっと弟のような存在なのだという。いま並べば完全に父と娘のよ
うな姿だが、母は弟だと言い張る。

「そ、そのリンゴは？」

「ああ、今年は果物の実りがよくてね。ぜひ、白竜どのにもいただ
いてもらおうと腕によりをかけたんだ。といつても、山小屋だから
あまり凝ったお菓子は作れなかったんだけどね。白竜殿にリンゴの

砂糖焼きはお口に合うかな？」

「いただくわっ。」

ハクスイは無類の甘い物好きだ。わざわざ人型になって小屋に入っただのも、きつとこの香りがしたからだろう。

「ラゼットさん、あの、王都への行き方を教えてほしいんだけど。」

「ああ、そうだね。だが、まずは座ってお茶にしよう。久しぶりに会ったんだ、少しぐらいかわいい娘の姿を見せてくれたって良いだろうっ？」

いたずらっ子のように笑うラゼットさんは、わたしのことを娘だっと言ってくれる。姉と慕う人の娘なのだから自分の娘でもある、というのがラゼットさんの言い分だ。わたしもラゼットさんは第二の父親だと思っているので、娘だと言ってもらえるのは嬉しい。

「しかし、サオリも思い切ったことをする。よくあの黒竜殿が許したな。」

おかしそくに笑うラゼットさんは、お母さんの暴走には慣れている。一緒にいる時間は、お父さんよりも長いからよく知っているのだ。

「わたしも不思議なのよね。どうやったのかしら？」

リンゴをほおばりながらハクスイも答える。確かに、あの過保護なお父さんがわたしを人間界へ送り出すなんておかしい。でも、わたしはなんとなく理由が見えていた。

「あのね。多分二人目を作る気なんだと思う。」

うぐつとハクスイがリンゴを喉に詰まらせる。ラゼットさんも頬をなでて、なんとも気まずそうだ。

「なるほど。だから4年もとおざけたのか。・・・わたしもしばらくは訪ねるのを控えておいた方が良さうだね。」

「まあ、確かに黒竜の子供を産むならそれくらいいいでしょうけど・・・。」

竜の出生率はあまり高くない。それは魔力を強く持つ個体が産まれにくいからだ。そして、竜の子を宿すにはお父さんが繁殖期。つまり発情期を迎える必要がある。竜の発情期は意識的に迎えることが出来るけど、一度迎えるとなかなか収まらないのだ。それこそ、2年から3年くらい続くらしい。娘の前で発情期を迎えるなんて出来ないとお父さんが抵抗していたので、二人目はしばらく先送りされていたのだが、一人っ子反対のお母さんがついに説得に成功して、それと同時にわたしの人間界修行も承諾させたんだらう。

「そんなにポンポン黒竜の血脈が産まれては困るんだけどなあ。」

ラゼットさんが頬を掻き、ゆるんだ顔をごまかそうとしている。パワーバランスを考えれば、黒竜の強い血を持った子供がたくさん産まれるのはまずいが、息子か娘が増えると思えば嬉しいのだらう。誤解を招かないように言っておくが、ラゼットさんには奥さんがいる。そして、子供もいれば孫も居る。でも、わたしやお母さんも家族だといってくれるのだ。

3 (唯一の常識人〃おじさん(後書き)

ちよつと切らせてください。異様に長くなってしまいそうなんです。
話を作るのがへたくそ過ぎで、一ページの量が安定しない・・・。

3) 続き

「まったくゆるんだ顔して。あ、そうよ。さつさと王都までの道を教えなさい。観光もしないといけないし、下宿先も見つけないといけないでしょう?」

13個のリングを平らげたハクスイは満足したのか、突然態度が大きくなる。竜たちはあまり人間を大切にはしない傾向があるが、ハクスイのこの態度は甘えているだけだと知っているので、ラゼットは微笑んだまま話を続ける。

「この山から王都までは、馬車だとひと月程度かかるんだ。」

ばさりと広げられた地図には、この大陸の地図が載っている。

「右上の大きな平野の中心が王都だ。ここの岩山は、ここ。だいぶ下のほうにあるのが分かるかい?」

こくりと頷くと、ばんばんと頭をなでられる。なんだか小さな子供になったような気がして、恥ずかしい。

「大陸には王都へつながる大きな街道が6つある。この山から行くなら、このザール街道という道に沿っていけば良い。この道の上なら魔物も滅多に出ないから女の子二人でも安心だ。」

説明を終えたラゼットさんをハクスイがじとつと睨む。ラゼットさんも、悪戯っぽく笑っているのでハクスイが不機嫌な理由は分かっているのだろう。

「なんで馬車なんかでいけないうの？って言いたいんだろ
う。」

「わかってるなら聞かないでちょうだい。わたしが飛べば3日もあればつくわよ。」

ふんつとふんぞり返るハクスイ、ラゼットさんは苦笑している。しかし、この件に関してはわたしもハクスイに賛成だ。わざわざ馬車なんかでいなくても、ハクスイにのせてもらった方がずっと早い。

「竜が個人を乗せているというのが問題なんだよ。アキには実感がわかないかもしれないが、竜というのは珍しい存在なんだ。黄竜くらないならまだしも、白竜はそんなにたくさん居る存在じゃない、人間に目を付けられるのは怖いだろう？」

「大丈夫よ。わたしはハクスイと契約をしたから、召還獣だって言えば平気でしょ？」

そうよそうよとハクスイが相づちを打つ。しかし、ラゼットさんはよけいに難しい顔になる。

「ハクスイと契約したのか？」

「え、うん。」

「はああああ……。そうだな、あの両親が常識を持っているとも思えないし。ハクスイも竜同士の感覚で契約を結んだんだろうし、アキもそれを受け入れるだけの魔力があるし……。」

頭を抱えてしまったラゼットさんは、なにかぶつぶつと言った後、

すつと立ち上がり奥の部屋へ行く。そして、銀で出来た指輪をわたしとハクスイに一つずつ渡す。

「本当はその指輪を通して契約を行うんだ。普通、宝珠の魔力をもるに受け取ったら人間の器は溢れて破裂してしまうからね。・・・アキだったから大丈夫だったものを、無茶をするんだから。」

ラゼットさんにじとりと睨まれたハクスイは目をそらしながら、さつさと指輪をはめてしまう。わたしはそんなハクスイを笑いながら、銀の指輪を人差し指にはめる。すつと吸い付くようなつけ心地は魔道具だからなのだろう。

「これでハクスイが目を付けられことは無いだろう。」

「目をつけられる？」

「首輪の無い竜は危ないんだ。野生の竜は人里に降りて来ないから希少な存在だね。一部の人間にとっては喉から手が出る程欲しい存在なんだよ。ハクスイならそうそう捕まりはしないと思うけど、無用な争いはされた方が良い。」

確かに、と頷く。危ない目に遭わないように注意するのは大切だ。

「じゃあ、この指輪があればハクスイに乗っていけるのよね？」

「ええっと、そうだね。・・・ここまでなら大丈夫。」

指差されたのは、平野への入り口だ。

「ここからは正規な免許、竜騎士団の免許を持つ者しか騎乗できな

い決まりがある。それを破ったら、反逆者として捕まってしまうから決してこの境界線を越えちゃいけない。」

つつと指で線を引かれた場所を良く見ておく。せっかく人間の世界を勉強しにいくのに、いきなり犯罪者として捕まるのはよくないだろう。

「ここまでいったら馬車を借りて、2日くらいだね。」

何か質問は？というラゼットさんの言葉に、とりあえず大丈夫と返す。なおも心配そうなラゼットさんに、わたしはにかつと笑ってみせる。

「もう、大丈夫だって！わたしの気配とハクスイがいれば、魔物は襲って来ないし、野宿も慣れてるし、お金だってこの辺りの薬草とか宝石を売れば大丈夫って言われたし。」

ね？と首を傾げれば、ラゼットさんも笑ってくれる。

「心配だが、可愛い子には旅をさせろというしな。なにかあればすぐに言うんだぞ。僕は王都の東のリヤールという邸宅に居るから。」

「え、ラゼットさん王都にいるの？」

王都に家族が居るといふのは知っていたが、確かこの森の生態系を調べるため、1年の大半はここにいと両親からは聞いていた。

「ああ、あと3ヶ月で任期が終わるからね、長期休暇を取ったんだよ。夏の終わりには帰っているから、遊びにおいで。」

「じゃあ、また夏のおわり遊びにいくね。」

「ああ、いつでもおいで。妻も、きみに一度会いたいと言っていたからね。」

そろそろいかないと、とハクスイに急かされ、慌ただしく別れを告げ小屋を出る。ばたばたと娘たちが小屋を出て、外から大きく羽ばたく音がし、その音が遠ざかった頃。ラゼットはゆっくりとなり、の部屋へ入る。がらんと広い部屋には、紫色に光る魔方阵が姿を現していた。

「うん。嘘はついてない。」

呪文を唱えれば魔方阵の光が強くなる、これは上級の魔法士のみが使うことを許された転移魔法のための魔方阵だ。

ラゼットの仕事は黒竜の監視、そのためにこの小屋があるのだが、実は王都の実家と小屋はつながっているので行き来は自由なのだ。三ヶ月で任期が終わるというのは、そこで一度報告をまとめるだけなのだが、すぐそばに頼る先が合つては成長しないだろうと、アキの母親に言い含められ、黙っておくよう約束させられたのだ。甘やかすのはよくないが、放っておくことも出来ない、ので三ヶ月という期限付きでアキにはがんばってもらうことにした。

「アキならきつと大丈夫だろう。・・・さあて、孫の顔を見に行こうかな。」

自らの息子の子供とは思えない程に可愛らしい孫は、彼のお気に入りだ。上機嫌で魔方阵に入り、ずっと消えた彼のことを娘たちは全く知らず、空の旅を楽しんでいたのだった。

3) 続き(後書き)

結局長くなった・・・ふがない。

彼女たちの旅は初めてのお使いみたいなものなので、監視ゼロにはなりません。過保護な父は、たとえ発情期になろうとも娘を気にし続けます。

4) 到着

空を飛ぶときにふわりと風が身体を包む感覚をアキは気に入っていた。白竜は風の精霊と水の精霊に愛されているので、風の抵抗はほとんどない。竜の中で最も早いという名は伊達ではなく、ハクスイの飛ぶスピードは下手したら黒竜よりも早い。

「アキ、今日中に平野の前まで行くわよ！」

「了解つ。でも大丈夫なの？」

「舐めないで、楽勝よ！！！」

ぐんつとあがるスピードに風の精霊が歓喜している。精霊は竜の魔力が大好物なのだ。竜は魔力を放出して、精霊に助けを借りて飛んでいるので、魔力が多ければ多いほど早く飛ぶことが出来る。もちろん、魔力を放出し続けるのでハクスイへの負担は大きいのだが、張り切っているハクスイには何を言っても無駄なので、アキはとりあえずは空の旅を楽しむことにした。

空が茜色から紺色の間にさしかかる頃、整備された道の向こうに塔が見えた。塔の周りはちよつとした街のようになっている。そして、薄く結界が張つてあるのも見えた。きつと、あれがラゼットさんの言う境界線だろう。

「ハクスイ、止まって。結界がある。あの街に降りよう。」

「わかった。」

3回ほど旋回して勢いを殺し、ゆっくり地上に降りる。街にはそれ

なりに人が居て、なぜかじろじろと見られた。ハクスイはさすがに疲れたらしく、わたしの影で休憩すると言って潜ってしまった。

「おい、見たか。あんな小娘が竜つれてたぞ。」

「いまの、白竜じゃなかったか？」

「馬鹿いわないのよ、白竜なんて騎士団でもエリートしか乗っていないのよ。」

街にいる人々の言葉からすると、わたしが白竜を持っていることがおかしいことらしい。なんでおかしいのかは分からないけど、あまり良い空気でもなかったのでさっさと塔の方へ行く。

「うつわぁ、おつきい……。」

塔だと思っていた建物は大きな門だった。でんと立つその姿はどこか実家の岩山に似ていて嬉しくなる。

すすつと近寄り、門をなでるとぴりつと指先を跳ね返す魔力を感じる。この大きな門を媒介にして結界を張っているのだ。侵入者を知するためだけの結界だからそんなに大きな魔力もいらないのだが、規模が規模だけにこれくらいの媒介が必要になったんだろう。

「おい、女の子。どうしたんだ、迷子か。」

軽い声は頭上からで、見上げれば門の窓から若い男が顔を出していた。

「さっきの竜ってご主人のдар。お使いか？」

「ご主人？」

「違うのか。じゃあ、あの竜は誰のだ？」

「誰のじゃないわ。ハクスイはわたしの親友よ。」

わたしのことばに面食らったような顔をする男、しかしわたしはそんな男の反応を見ることがもなく歩き出していた。ハクスイをまるで所有物のように言う男が気に食わなかったのだ。

「失礼しちゃうわ。」

ふんつと、鼻を鳴らし歩いていたらわたしは自分の失言に気づくことも出来ず、そのままずんずんと街中を進んでいった。

4) 到着(後書き)

白竜は希少価値高いのです。しかし、もっと希少価値の高いものに囲まれていたのでアキには自覚がありません。わたしも、小学校出るまでは米が売っていることを知りませんでした。田舎は食料のみ豊富です。

5) 出会いは勘違いから

「とりあえず宿と、馬車の確保ね。」

ラゼットさんから宿のとりかた、馬車を貸し出す場所のことを教わっていたわたしはそれらを探しながら、のんびり街中を散策していた。確か換金所というものもあるはずだから、そこにもいかなければいけない。

「ハクスイはまだ寝てるし。・・・馬車は明日で良いか。まず換金所ね。」

人間の世界で生きていくのに困らない程度には字が読めるので、街中の看板を注意深く読みながら進む。さっきはざわついていた街中もすっかり落ち着いて、アキのことをじろじろとみてくる人間はいなかった。

「こんなにたくさんの人間を見たのは久しぶりかも・・・。」

月に1度か2度、母が里帰りと呼して山の下の街へ行くのだ。こんな大きな街ではないが、その街だけは黒竜の妻のお母さんとその娘のわたしを迎え入れてくれる。でも黒竜の娘、という看板は大きくてみんな遠巻きにしか近寄って来なかったから、こんな雑多な人波を歩くのは初めてだ。

「ん、なんでも引き取ります、換金、所。・・・換金所見つけた！」

物々しい建物の隣にちよこんと建つ店は可愛らしく、アキでも物怖じ無く入ることが出来る。

からん、とベルが鳴り中へ入ればこわもての男の人が何人かと女の人が二人居る。カウンターの向こうのおじさんは愛想が悪く、じろりこちらをにらんできた。

「う、なんか行き辛いなあ。」

おずおずとカウンターへ近づけば、なにか？と低い声で訪ねられる。ラゼットの柔らかい声が基本だったアキには聞いたことの無いだみ声で、なんだか緊張してしまう。

「あの、薬草と宝石を持って来たんですけど・・・。」

「ふん、使いか・・・さつさと出しな。」

「はいっ。」

小さなポシェットしか持っていないアキを見て、男は大したものはないだろうとため息を吐く。この辺りには高価な毛皮や角を持つ魔物は少ない、そして宝石や薬草もあまり採れない大地なので、換金所に寄せられるものも質が悪いのだ。

「よいしょっと。」

アキは自分の影に手を突っ込んで、出がけにつんで来た薬草と、実家の周りに落ちている宝石をばらばらとカウンターに並べていく。

「あの、薬草は影の中でもあまり長く持たないので先にお金に換えたいんです。宝石は、とりあえずその辺が一番小さいので・・・えっと、あの聞いてます？」

主人は目を疑っていた。使いの少女が影を使った魔法、隠遁の魔法を使っていることも驚いたが、なによりも竜の住む土地にしか生えない竜草や、かなり純度の高い魔力の宿る宝石をこともなげに出してみせたところから、この少女の主人はよほどの魔法使いか冒険者だろうことが予測される。

このあたりにこのレベルのものを持ち込める冒険者も魔法使いもいなかったはずだが、ということなのだろう。

「っ少々お待ちくださいませ！」

主人は疑問を覚えながらも、薬草は冷凍の魔法がかかった袋へ、宝石たちは盗難防止の魔法がかかった麻袋へ入れていった。にやつきが止まらない男をアキは不振げに思ったが、とりあえずお金に換えてくれそうなので放っておく。

「へ、へへ。そうですね、これだけありましたら金貨50枚くらいでしょうかね。」

ニタニタと笑う男が金貨を袋に詰め渡してくる。金貨50枚がどれほどの価値かは知らないが、とりあえず宿に泊まって馬車を借りるぶんくらいはあるだろう。

「わかりました。」

麻袋を受け取ろうと腕をのばしたとき、ぱしっと麻袋を横からとられる。驚いて横を見ると、店内に居た女の人がむっつりとした顔でたっている。

「おやじ、両手いっぱい竜草に魔力の宿ったルビーが4つ、サファイア2つで金貨50つてのはちよおつとあくどくねえか？ 少なく

見積もつても金貨100はあるだろう。しかも影で運んで痛みが無いとなりや、金貨125、いや130はくだらねえ代物だと思つぜ？」

女の人にしてはハスキーな声で捲し上げていくと、カウンターの男は真っ赤になつていく。

「警邏隊にチクられんのはいやだろ。金貨140で黙つていてやるよ。安心しな、そんだけのものがあれば赤字にはなんねえよ。」

真っ赤から真っ青になつた男は、うーとうなつた後に先ほどの麻袋をもつふたつ差し出す。うし、と笑顔になつた女の方はあつけにとられているわたしの腕を引いて交換所をでる。一緒にもうひとりの女の人もでてきたけれど、わたしはそれどこじゃなかった。わたしよりも頭三つは背が高い女の人に引きずられないようにすることです。必死だつたのだ。

5（出会いは勘違いから（後書き）

竜草はすりつぶせばオロ。インのような万能薬になればいいな。もち
ろん設定なんて作っていません。突発的作品ですからね！

6) 人の話は聞きましょう

交換所からだいぶ離れた場所にある宿屋、と書かれたところに入ると、ようやくわたしは女の人から解放された。

一階はご飯を食べるところらしく、女の人とは親しげに飲み物を注文し、少し待てばわたしのまえには甘い香りのするミルクが、二人の前にはすこし苦そうな香りのする黒い液体がやってきた。

「さて、ちび。まずはこの金をしまえ。隠遁の魔法つかえるんだろっ?」

ずいっと出された麻袋を見て、わたしは隠遁?と聞き返す。女の方は呆れたように、影に入れろ、と返してくる。

納得したわたしは慌てて麻袋を影へ入れる。すると中から痛つとハクスイの悲鳴が響いた。慌ててしまったから、ハクスイの上へ金貨を入れてしまったのだ。

「あ、ハクスイごめんっ!」

いいわよう、と影の中から気のない返事が返ってくる。どうやら寝ていたらしい。一度寝付いたハクスイはなかなか起きないのだ。

「おまえ契約獣いるの?」

「え、はい。ハクスイっていうんです。」

「なに、魔獣?」

「白竜です。」

目の前の女の人黒い液体を噴き出す。咄嗟によけると、次は隣の女の人が頭を抱えて呻きだした。二人の反応の意味が分からなくて頭をかしげていると、はああああ、と深いため息が聞こえた。

「街道で白竜つれた力モがいるってお前のことだったのな。まったくお前は一体何者なんだ？」

呆れたような口調に、どう返せば良いか考える。黒竜の娘です、っていうのは無理だから、どう説明したら良いのか分からないのだ。

「ええつと、ええつと……。ふつつの街娘です。」

「ばあああか、隠遁の魔法使えて、白竜つれてる普通の街娘なんているわけねえだろ。しかもあのレベルの宝石に竜草なんて黒の聖域か、白竜か赤竜の繁殖地くらいでしかとれねえんだよ。……で、どこの家出娘だ。それとも盗人か？」

じろりと睨まれて涙が浮かぶ、すごく綺麗な女の人なのに妙に迫力があるのだ。お母さんにもお父さんにも、ラゼットさんにも叱られたことはあるが、こんな風に睨まれたことはない。どうしたらいいのかわからなくてパニックになっていると、影からぶわつと風刀が現れる。明らかに殺意を持って放たれたその風を女の人たちは難なく相殺する。

「そっちがその気なら、やる気になるけどな。へっ、最近骨のあるやつが居なくてなまってたんだよなっ！」

ごうつとあがる魔力は深紅、炎の精霊に愛された人物の魔力だ。魔法は無属性でも使えるが、精霊の加護をもらい属性をつけた方が偏

りはあるがずっと強力な魔法がつかえる。

「いや、そんなつもりじゃ……。」

どう説明しようかと混乱していたら、影からハクスイが現れた。濃い魔力の気配に頭が痛くなる。これは、ハクスイが怒っているときの気配だ。

「アキ、あの男、殺していいのよね。あたしのアキを泣かそうとしたんだものね。それくらい当然でしょ？」

案の定ハクスイは怒っていたが、わたしは全く関係ないところでシヨックを受けていた。

「男？」

「雄の匂いがするわ。」

「うそつ、あんなに綺麗なのに！」

ちりつと頬に熱が飛ぶ。ハクスイの結界があるからほんのり暖かいだけだが、気がつけば真つ青な炎であたりは火の海だった。

「俺はな、弱いやつと俺を女だと勘違いするやつを殲滅するって決めてるんだ。」

赤い髪の毛が熱風で巻き上がる、もう一人のお姉さんがごうつと口から炎を吐く。

「あ、やっぱり竜だったんだー。」

なんとなく同族の気配を感じていたので驚きはしないが、美人のお姉さんが豪快に炎を吐く姿は、なんだか不思議だ。

「ふん、赤竜なんてわたしの前では赤ちゃんみたいなものよ。すぐに殺してやるわ!」

ハクスイの手には水の高位精霊たちが集まって来ている。確かにハクスイの魔力で押し流せば、彼らは倒せるだろう。しかし、この精霊の量でしかもハクスイの魔力を上乗せすればこの街すべて押し流すレベルの水がうまれてしまう。

「ちょ、ちょっとハクスイ。やりすぎだつてば!」

「わたしのアキを虐めたんだから、これくらいやらないと気がすまないのよ。」

「ふん、それくらいの水蒸発させてやるよ。」

「なんですって!?!」

「もう。・・・や、め、な、さーーーーい!!--!」

6) 人の話は聞きましょう(後書き)

主人公キレました。呆れる程に周りのキャラが言うことを聞かれません。ええ、聞きませんとも。こんな展開にする予定じゃなかったのに。軽く違うキャラ出したくなっていう浮気心のせいで、いつまでたっても学園にたどり着けない。

7) 喧嘩両成敗

二人の手元にいた精霊が掻き消え、一瞬で炎も水の気もなくなってしまう。そして、地面からごうつと石柱がせり上がり、あつという間に二人は岩の檻に閉じ込められてしまった。

「アキ、ちょっと。なにこれ、アキ!!」

「てめえ、くそちび。なにしやがった!」

赤竜のお姉さんはほつとしたようにあたりを片付けだす。先に結界を張っていたので、お店の損害は机一つに椅子がみつ、そして床に穴があいて焦げている程度で収まった。

「ハクスイ、いくらわたしが泣きそうだったからって相手を殺して良いはず無いでしょう!わたしは何回も止めてっていったのに、あなたのお父様に言いつけるわよ?」

「え、ああ。ダメよ、ダメっ。ごめんなさい、アキ。謝るから、お父様には言わないでえ!」

必死に良い募るハクスイの檻を崩し、影に入ってもらう。影に入る直前に、檻に入っている男の人を思いつきり睨んでいたことは許してあげることしよう。ハクスイはあくまでもわたしのために怒ってくれたのだから。

「いきなり攻撃してしまって本当にごめんなさい。でも、わたし家出でもないし、盗人でもありませんから。」

するりと檻を外し、席を外そうとすると強引に席へつかされる。何なのかと顔を伺えば、お姉さん改めお兄さんは疲れたように口を開いた。

「俺は、この国の騎士団副団長だ。」

突然の言葉にどう反応したら良いかが分からない。アキには騎士団の副団長がどれほど偉いのか分からないのだ。ぼかんとした様子のアキをみて、よけいに疲れたらしいお兄さんはぐしゃりと髪の毛を乱す。そうしていても、やはり綺麗なお姉さんに見えてしまうのは繊細な顔立ちのせいだろう。

「騎士団の副団長は強い。その俺の一番得意な火炎魔法を解いて、あろう事か土檻に閉じ込めた危険人物をこのまま返せるわけねえだろ。」

「き、危険人物？」

「あつたりまえだろ。火炎魔法なら右に出る者無しって言われた俺を押さえるなんて、本当にお前何者なんだ。」

危険人物の一言にショックを受けながら、説明の言葉を考える。竜の血のおかげで精霊は基本アキの味方だ。黒竜が強いのは精霊に愛されているからで、だからこそ発動中の魔法を解除するなんて荒技が出来るのだが、どうにもこれは説明が難しい。

「ご主人、その方は高貴な方です。あまり詮索はなされぬ方がよろしいかと。」

赤毛に金の瞳の美人さんが戻ってくる。宿の主人へ謝りにいっ

たのだろう、奥で主人がまたかよとばかり声が聞こえる。そんなしよっちゅう宿を破壊しているのだろうか。

「シーラ、お前こいつを知っているのか？」

「いえ。面識はありませんが・・・、この方を脅かせば国が危険です。」

「はあ！？どういうことだよ、意味わかんねえ。」

ちらりとこちらをみるシーラさんは多分分かつている。同族なら嗅ぎ分けることの出来る匂い、黒竜の血の匂いを。その証拠に、ちょっと顔が引きつっている。

「ええつと、シーラさん。その、あの・・・。」

「あなたが隠すというのなら、わたしは何も言いません。」

「うおいつ、お前の主人は俺だろうが！」

「ご主人、これだけは言えないのです。ご主人を危険にさらすことは出来ない。ただ・・・少しだけかじられるかもしれませんが、ご主人なら大丈夫です。」

「はあああ！？」

いえ、と返すシーラさんの顔は疲れている。そりゃそうだ、黒竜の娘を傷つけたら一族郎党の命が危ない。わたしもなるべくはそういうことが起こらないようにするけど、キレたお父さんを止められるのはお母さんだけなのだ。

「なんなんだよ、わっわけかんねえ。・・・あー、わかったよ。詮索はしない。でも、王都には一回来てもらっからな。お前みたいなのを今まで野放しにしてたかと思うと恐ろしくていけねえや。」

ひらりと腕を振れば、きらりと光る紙が現れた。さらさらとなにかを書く、また腕を振る。紙はしゅんつと消えて、光の粒子だけが机に残った。

「うわあ、いまのなんですか？」

「・・・隠遁の魔法に無効化の魔法に、あのレベルの土魔法が使えて、伝達の魔法を知らないのか。」

「え、えつと。おかしいことですか？」

「いや、おまえはもうどこから突っ込めば良いのかわかんねえ。」

「んん？・・・あつ、そうだ。王都での用事つてすぐ終わります？わたし学園に行かないといけないんです。」

「・・・えつと、待て。お前学園の生徒じゃないのか？」

「？はい。入学する予定ではありますが、まだ生徒ではありません。」

頭を抱えてしまった男の人を見て、最近頭を抱えている人を良く見るなあとラゼットさんを思い出す。きっと自分の常識が足りないんだろっけど、何が足りていないのか分からないから謝ることも出来ない。

「学園に行っていないのに、なんであんな高等魔法使えてんだよ。しかも無詠唱ってことは精霊つかってんだよな。土属性でそんな魔法使えるやつがいるなんて聞いてねえぞ。」

「え、わたし土属性じゃないですよ。」

「は？」

「わたし光以外なら「アキそれ以上言ったら危ない。」」
するりと現れたハクスイに口を塞がれる。

「おい、どういうことだよ。まさか複合術者なのか？」

「わたしが風と水使えるから、土だけじゃないってことよ。わかった、男。」

噛み付くようなハクスイの様子に、男の人の目元が陰しくなる。また一戦始まりそうな気配に慌てていると、シーラさんがハクスイに手のひらを見せて礼をする。

これは竜同士で行う挨拶のようなものだ。古風な挨拶で、いまはそんなに使われていないが、基本的に敵意が無いことを示すときに使われる。

ハクスイはそれをみて、ふんつと息をつく。とりあえず喧嘩をすることはやめたようだ。

「シーラ、お前。」

「この白竜は高位です。中位のわたしには荷が重い。それに、これ以上ご主人の寿命を縮めるわけにはいかない。」

「だあかあら、なんで俺の寿命が縮むんだよ。まったく、わけわかんねえな。」

不機嫌そうにがしがしと頭をかきむしると、突然ざつと立ち上がる。軽い雰囲気だった先ほどとは打って変わり、威圧感のある姿にハクスイが身構える。

「わたしは第一騎士団、副団長。ラシャル・ディ・サラムリオン。汝の名を答えよ。」

「え、う。アキです。」

「アキ。王都までの任意同行を求める。」

「に、にんいどうこう？ってついていけばいいんですかね？」

「そうだ。」

「拒否って……。」

「拒否はすなわち反逆と見なし、その場で捕縛する。」

「ですか……。あー、はいわかりました。着いていきます。」

「うし。シーラ準備しろ。ちびも、着いてこい。」

「ちびじゃなくて、アキです！」

「おうおう、アキついてこーい。」

緊迫した空気を醸し出していたかと思うと、がらりと空気がかわる。
軽く気さくなほづが素なんだろう。少々柄は悪いが、根はいい人だ。

7) 喧嘩両成敗(後書き)

赤竜って、あかりゆうとせきりゆうどっちがかっこいいかなあ。と未だに悩んでいます。読む方は好きな方でどうぞ。もちろん、赤竜とかいてレッドドラゴンとかでもいいですよ。・・・うん、これよくない？これにしようかな。・・・でも懐かしいカードゲーム思い出しちゃうんだよなあ。俺のターン!!

8) 王都へ出発

宿を出れば、街道には武装した人相の悪い男たちが5、6人で集まっていた。にたにたとした顔はろくなこと考えていません、とかかれているのだが、アキは全く気がつかずそのまま通り過ぎようとする。

「はあ、お前それでこの先平気なのか・・・？」

肩をつかまれ歩みを止められたことを不思議そうに見てくるアキは、なにもわかっていない。

「ラシャールさん、どうしたんですか？」

「あー、ラジでいい。ラシャールなんて柄じゃねえんだ。ちょっとシーラのところで待ってろ、その白竜もおとなしくさせとけよ。」

「ハクスイよ！」

「あいあい。すぐ終わるからちよっと待ってろ。」

シーラとハクスイに保護されたアキはなにがなんだかわからないが、とりあえずおとなしくしておくことにした。男たちはラジを女だと思っっているらしく、口笛を吹いて茶かしたりしている。

「姉ちゃん、俺らが用あんのは後ろの小娘なんだよ。」

「痛い思いしたくなかったら、ちよっとどいといてくれるか？」

ラジはひとつ大きなため息をつき、ゆっくりと剣を構える。

「本当に、悪党ってやつは台詞がワンパターンなんだよ、なっ！」
剣を一ふりすれば男たちがざっと離れる。

「おら、お前らめんどくさいんだよ。さっさとかかってこいよ。」

ラジの一言で男たちが逆上し、咆哮をあげながら切り掛かってくる。しかし、ラジはとても強く、あつというまに男たちは地面に沈んでいく。6人目が地面に沈んだとき、ようやく街の警邏隊たちが駆けつけた。はじめは倒れふしている男たちが被害者でひとり立っているラジが加害者なのかと疑った彼らだったが、騎士団のものだという身分証を出したら、あつさり疑いが解かれた。

「ラジさんすごい、強いんですね！」

「お前がそれいうかつ。」

「え？」

尊敬のまなざしで見てくるアキの頭をぐしゃりとなで、警邏隊に適当に挨拶をしてシーラのもとへ行く。この娘に害がないのは分かったが、ここまで世間知らずなのに自分を押さえ込める程の力がある人物を放っておくわけにはいかないのだ。

「アキ、行くぞ。」

「え、わたしハクスイがいますよ？」

「ばああか。任意同行で自分の竜に乗せるわけねえだろ。こつちだよ。」

ひょいっと担がれ、そのまま竜化したシーラさんの上へ飛び乗る。ぼんつとおとされたのはラジの膝の上で、思わず抵抗してしまう。父親以外の男性とこんなに接近したのは初めてなのだ。

「なんだよ、いまさら逃げようつてのか？」

「ち、ちがつ！近いんです、わたし後ろの方で良いんで！！」

「ばああか、赤竜と白竜じゃ風の抵抗が違うんだよ。お前みたいなちびじゃすぐに振り落とされるだろ。」

「大丈夫ですー！わたしムキムキなんで、実はマッチョなんで！！」

「うつせえ、黙れ。いくぞつ。」

端から見ればどう見ても人さらいだった騎士団副隊長は、さつさと危険人物を王都の隊長に丸投げすべく、パートナーの赤竜の手綱を取った。

8) 王都へ出発(後書き)

とりあえず書きためてたのはここまで。突発的に始まって、学園ものだと言いながら学園にたどり着きもしていない。主人公は任意同行されているし。

わたしは学園ものが書きたかったのに――！

9) 騎士団内部

ごうつと舞い上がる砂塵に目を閉じれば、身体が地面に残されるような不快感の後、ゆっくりと赤竜の身体は浮き上がる。

白竜は風に加護があるから、ふわりと浮き上がるのだが、赤竜は炎と土の加護のため、筋肉のみで飛ばなければいけない。なので飛行は非常に荒い。

「うっわあああ、落ちるっ。落ちるー！」

慣れない衝撃に身体がぐらりと揺れるが、そこはがっしりとラジさんに捕獲されていたお陰で大丈夫だった。

少々の高さでは死にはしないのだが、それと落ちる恐怖は別なのである。

「だああ、お前暴れんなって。一回風に乗れば安定するから、ちょっと黙れ。」

全身をゆさぶられ、少し気分が悪くなって来たころ、ようやく風に乗り飛行が安定してきた。

「王都まで飛んで2、3時間ってところだ。ちょっと寝とけ。」

「こんなところで寝れる訳ないじゃないですか。」

「いいから寝とけて、疲れてるだろ。」

ぐっと抱きしめられれば、否応無しにラジさんが近くなる。このままラジさんを見つめるよりは寝ていたほうがマシ、と結論づけたわ

たしは目を閉じた。

すると、身体は疲れていたのか次第に睡魔がやって来て、アキは気がつかないうちに眠りの世界へと落ちていた。

「ったく。本当に神経の図太いやつだよな。．．．いいかげん起きろって、ちび！」

揺り起こされ、ぱちりと目を開ければ、そこには困った顔のラジさんと目も眩まんばかりの美少女が般若の形相でこちらを睨みつけていた。

「この女がお兄様をたぶらかした目ギツネですね？」

「は？」

「とぼけても無駄ですわよつ。婚約者が居ないところを狙ったのかもしれないが、そうはいきません！」

金切り声をあげている女性はなぜかアキに対して怒ってる。しかし、アキにはなぜ女性がこんなにも怒っているのか分からないため途方に暮れていた。助けを求めるようにラジさんを見ても、むりむりと首を振られてしまった。

「こうなったら決闘です、そうですね、愛をかけて決闘です！」

「もうやめなさい。」

ごんつと鈍い音がして、女性が一瞬静かになる。そしてみるみるう

ちに大きな瞳は涙で溢れ、たまりきらなかったしずくはぼろぼろと頬を伝う。

「い、いたいですわあああ！！」

パニックになった女性をくりとひっくり返し、奥に控えていた小柄な女の子二人に女性を渡す。女の子たちは素早く扉を開け、女性を外に出してしまった。廊下にはまだ女性の声が響いていたが、とりあえずは静かになる。

「ラジ、婚約者はきちんと見とかないと。」

「・・・妹だ。」

「本人は婚約者だといってるんだから、認めてあげればあ？」

「ふざけんなよ。血のつながった妹だって言ってるだろうが！？」

「禁断の愛、すばらしいじゃない。」

「・・・てめえ・・・。」

テンポよく言葉を投げ合う二人は友人同士なのだろう、とても仲が良さそうだ。その青年はとても綺麗な緑の髪をしている。緑の髪の毛に、紫がかった瞳、端正な顔は人形のような。

「えっと、ラジさん。わたし状況が良く分かっていないんですが。」

「ん、ああ。すまねえ、ここは第一騎士団の応接室だ。」

ラジさんの話によれば、寝ても良いと言われた後わたしは熟睡してしまい、王都に着いた後も眠り続け、ゆすつてもなにをしても起きなかったのでとりあえず応接室に転がされていたのだという。

9) 騎士団内部(後書き)

久しぶりに投稿。美人ばかり出していますが、わたしは地味な顔が大好きです。笑ったらくっしやくしやになる顔ラブです。そのうちくっしやくしやな人も出したいなあ。

10) 外見で判断してはいけません

「悪かったな。巻き込んで。隊長が会いたいつてうるさいんで起こしに来たら、あいつにみつかったちまつてな。」

「えっと、婚約者さん？」

「妹だ！」

反射的な返しに思わず笑ってしまう。そんなわたしを睨みながら、ラジさんは話を続ける。

「女連れ込んだ部屋はどこだって散々ごねられて、仕方なく連れて来たんだよ。」

「まったく、ラジはメアリには甘いんだから。」

「廊下であること無いこと叫びながら泣かれてみるよ、言うことを聞かざるを得ないだろうが。」

「そこを黙らせるくらいじゃないと。ふふ、まだまだだねえ。」

「うつせえ。」

むつすりとふてくされてしまったラジさんを面白そうに眺めると、男の人はくりとこちらを向く。ソファの前で膝を折り、わたしと目線を合わせて、それはそれは綺麗に微笑んだ。

「僕は第一騎士団、副団長補佐、ロウイ・マクファーンといいます。事務仕事のできない団長と副団長を支えるのが僕の仕事なんだ。」

まるで花開いたような美しさが広がり、ふと両親を思い出す。母がこういうたぐいの微笑みを浮かべたときは、機嫌が悪いかなにかを企んでいるときだったので、アキは咄嗟に身構える。すると、ロウイは花のような笑みを引込み、今度はにいつと猫に良く似た笑みを浮かべた。

「うん、合格。さあ、団長のところへ行こうか。」

「え？」

「僕の美しさをもともしないのは少し腹立たしいけど、襲撃しようという意思も見受けられないし、武器を隠している様子もなし。なにより、軽い自白魔法をかけたのに全く効かないってことは心身共にやましいことの無い証拠だね。」

つらつらと並べられる言葉に、呆然としてしまう。人の良さそうな笑みは消え、人を見下した笑みでこちらを見る姿は、さっきまでとは別人のようだ。

「まったく、お前はもうちょっと人を信用しろよな。」

「いやあ、女性経験の乏しい君に女性の演技を見破るのは不可能だろうと思って……。」

「いっぺん死ぬか、ああ？」

ロウイさんの性格がちょっとアレでも、やはりラジさんと仲はいいらしい。じゃれている姿は子竜たちを思い出させる。

ふたりの口論を聞いていると、ショックで固まった頭が少しずつ動き出す。何やら疑われていたのは心外だが、偉い人になればなるほど面倒なことも増えるのだとお父さんが言っていたので、仕方が無いのだろう。

ようやく王都にたどり着いたというのに、前途は多難だ。

10) 外見で判断してはいけません(後書き)

本当に、ようやくたどり着いたのに、学園にはまだ遠い。学園ものが書きたいよー。

11) 家庭内不和？

にぎやかな口論を聞いていて、ふと親友の気配がないことに気がつく。

「ハクスイ・・・？」

ふつと影に意識を向ければ、いつも感じられる扉の気配がなくなっているのに気がついた。慌てて魔力を集めてみれば、なにか結界のようなものにせき止められる。力を入れても結界は軽くたわむばかりで、魔力を出すことが出来ない。

「あれ？」

何が起こったのか聞こうと前を見れば、ロウイさんがこちらを凝視していて、思わず後ずさりをしてしまう。

「この子本当に人間？」

「・・・たぶん。」

ロウイさんの言葉にカチンときてみると、ラジさんに薄汚れた紙を渡される。そこには、『使い魔禁止！』と大きく書かれていた。

「ここは騎士団の本部でな、奇襲されちゃあ困る場所なんで、大規模な結界が張ってある。魔族や、竜の魔力を封じる結界だ。でも、原則として赤竜なみに魔力が無いと反応はしない。」

わたしの魔力は竜の魔力だ。反応して当然なのだけど、いまは非常

にまずい。

「この子、使い魔もいるでしょ。」

「白竜だ。」

「どこの犯罪組織の人間？」

怪しげに見られて、悲しくなってくる。魔力はきちんと封じているし、髪の毛の色もごまかしたのに、どうしても人外扱いされるんだろう。

「そっといえばお前どこから来たんだ？」

今更すぎるラジさんの質問にロウイさんが顔をしかめる。

「そんなことも聞かずにつれてきたの？ そっといえば、この子任意同行だったわけ。なにやらかしたのさ。万引き？ 詐欺？」

再び二人分の視線がふってくる。ラジさんの質問も、ロウイさんの質問も非常に答えにくい。どうしようかと冷や汗を背中に感じたとき、部屋の扉が開き、若い青年がひょいっと顔を出した。

「あ、いたいた。全く、俺だけ置いていくなよなあ。」

平凡を絵に描いたような青年は、質問内容に悩んでいたわたしの頭を大きく揺らがす程の衝撃を与えた。髪の毛が黒いのだ。瞳は濃い緑だが、髪の毛はどう見ても漆黒。そう、黒竜しか持たないはずの色。その色の意味するところは、……家庭崩壊の危機。

「その子がラジを吹っ飛ばした危険な子？」

「え、なにそれ。そんな面白い話僕聞いてないんだけど。」

「吹っ飛ばされたんじゃないよ。閉じ込められたんだ！っていうか、団長なんでここに！？」

「えー、だってロウイがなかなか帰って来ないし。ラジ吹っ飛ばしたなんてどんな豪傑なのかと思ってさあ。こんな女の子だとは・・・あれ俺なんかした？」

キレたお母さんのことを考えて悲壮な顔をしていたわたしを見て団長と呼ばれた人が焦っている。そして、ああ、と苦笑して髪の毛をかき回す。

「これが珍しかったのかな。えっと、俺はちょっと珍しい血が混ざってるんだよ。別に黒竜の落とし子とかじゃないから。」

「そんな血統だったらもつと強かったでしょうしね。」

「ロウイ、給料減らすぞー。」

「ああああ、それだけはやめてっ！」

珍しい血がなんなのかは気になったが、とりあえず家庭の危機は乗り越えられたようだ。ほっと息をついたところで、改めて団長さんと向き合う。

「えっと、あの。アキといいます。」

頭を下げれば、人の良さそうな顔に、人の良さそうな笑みが浮かぶ。簡易の鎧に、腰の剣がなければ、本当にどこにでもいそうな青年だ。

「俺はこの国の騎士団を治めてるリヨウタ・イシイっていいます。腕っ節はこいつらのほうが強いんだけど、強い結界が張れるからこんなポジションに居るんだ。」

「・・・ねえラジ。」

「それ以上言うな。あの人の自覚の無さは今に始まったことじゃない。」

二人がなぜか遠い目をしているが、その理由をアキは知らない。しかし、この団長と呼ばれる人物は本人が言う程弱い訳ではないのだらう。

11) 家庭内不和？（後書き）

団長は、どこにでもいる普通の青年です。緑頭や、赤い頭を登場させておきながら、わたしは黒髪大好きです。しかし、設定上黒髪を出すのは非常に難しい。ああ、わたしのばか！

12) ばれちゃいました

「えっと、どうしょっか。とりあえずロウイ書類つくってな。」

また僕が、とぶつぶついながら手元に白い紙を出現させる。まじまじと見てみると、ラジさんに前を向けと怒られた。

「さて、まず……。ラジ、この子の魔力はどれくらい？」

「結界に封じられる程度です。」

「そんなに!？」

「そして何か訳ありらしいっすよ。俺のシーラがおびえてました。」

「ええ、なにそれ。・・・あつ、そうだ。ミサキに聞いてみようか、何か分かるかも。」

団長さんは、襟元から華奢なネックレスを引っ張りだすと、あたりに簡易結界を張り始める。

「でも団長、うちのシーラは頑として口割りませんでしたよー。」

「ダイジョブ、俺のミサキは素直だからあ。」

きらきらと魔力がひかり、その場の結界が少し緩む。

「ミサキ、おいで。」

団長さんの柔らかい声が響き、影が揺らぐ。するりと現れたのは白竜の子供、美しい少年だ。

白い髪のに、紫の瞳はハクスイと同じだが、可愛らしさでは圧倒的に少年の勝ちだ。こぼれ落ちそうな瞳に、小振りの唇、そしてなにより上目遣いでおどおどした姿は危ない性癖を持つ者にとってはたまらないだろう。

「リョータ、何？・・・ひっ！なっなんで！？」

初対面でこんなにおびえられたのは初めてかもしれない。アキを見たたん、少年は真つ青になってしまったのだ。きつと、影から半分だけ出ているハクスイが怖いのだ。きつと。結界が緩んだとたん、ずるりと影から現れたのだが、まだハクスイにとっては居辛い環境らしく上半身しか出していない。

「どうして、ハクスイ様が？しかも、黒の姫様までいる・・・。」

少年の言葉に、ため息をつく。やはり、アキのことはわかるようだ。

「あんた、ニーノの息子ね！最近見ないと思ったら、人間なんかの所に居たのね。」

「ぼっ、ぼくのマスターを悪く言ったら、ハクスイ様でも許さない！」

「ああ、泣き虫ミサキに何が出来るのかしらあ？」

「はいはいはい。ミサキ、ちょっと下がれ。アキさんも、そのホラーな美女を引っ込めてくれる？」

団長さんが二人の間に割り込み、ミサキくんを結界ぎりぎりまで下からせる。ハクスイは不満そうだったが、とりあえずいったん影に入ることをよしとした。

「はい。俺からミサキへ質問、この子は何もの？」

ミサキくんが音を立てて固まるのが見えた。主人からの言葉に答えないが、黒竜の娘だと言えば面倒なことになるのは分かっている。アキが視線に全ての力を込めてミサキを睨めば、ミサキの身体はさらに固まった。

「ミサキ、俺からの言葉なのに聞けないのか？」

口調はあくまでも柔らかいのに、どうしてか背筋が寒くなるような声音で団長はミサキへ尋ねる。

「あ、あの。マスター……。」

「ミサキ？」

「あ、あうづ。」

「……毛虫の刑だな。」

「この方は黒竜の娘です!!」

悲痛な叫びは部屋に響き、その場に居た人々全ての動きを奪った。

12) ばれちゃいました(後書き)

ばれました。ばらす予定じゃなかったのに、もう、キャラクターが
いっさい言うことを聞きません。どうにでもなればよいよ！

13) 人という生き物は

アキは魔力を込めてミサキを睨み、ミサキの髪の毛をこがす。
人がせつかく苦勞してごまかして来たのを、毛虫ごときでばらすなんて!!

「黒竜って・・・実在したのか。」

魂の抜けた声で団長が漏らせば、ミサキは泣き声まじりの声ではない、と返す。

「僕たち、竜にとって黒竜は崇高な存在、大きすぎる力はゆがみを生み出すから人々へ軽はずみに存在を明かしてはいけないことになっているのです・・・。だから、神話として人々には伝えられているのですが、黒竜はきちんと実在しています。」

ミサキはちらとこちらを伺いながら話す。

「そして、黒竜様は奥方様を迎えられ、14年前に姫様が誕生なされたのです。」

「その姫様があの子ってこと?」

「は、はい。」

アキは非常にやさぐれた気分で佇んでいた。たどたどしい口調ながら、ミサキはアキについての情報を全て明かしてしまったのだ。人間世界で楽しく生きていく計画が台無しになったところか、軍部に黒竜の存在を知られるなんて非常によろしくない。

「のわりには髪の毛、茶色いよねえ？」

ロウイさんの疑問に、わたしは行動でもって返した。するりと魔封じのペンダントをとったのだ。

ざわりと結界がたわむ感覚、そして押さえつけようと戻ってくる魔力をわたしはねじ伏せる。力勝負はわたしの勝利で、結界は高い音を立てて割れてしまった。

「魔力を半分に封じていたんです。まったく、全部ばらしてくれちゃって、どうしてくれるのよ。」

漆黒の髪の毛をなびかせて、仁王立ちする少女からは野生の竜たちと同じ威圧感を感じる。

「すっげえ、魔力。白竜並なんじゃねえか・・・？」

「しかも上位だね。」

「マスタぁ・・・。」

「ごめんミサキ、ちょっと荷が重いかなあって・・・。」

結界が破られたため、ハクスイも出てくる。団長さんが美人だな、とのんきにつぶやくのが聞こえた。

「あー、人間の世界でどつきどきミラクルな学園ライフを送る予定だったのにー！」

だしだしと床を踏んでいると、ハクスイに頭をなでられた。なんだ

か自分が幼い子供になったような気がして、恥ずかしくなる。

「えっと、姫様は学園に行く予定だったの？」

「アキでいいです。」

「ああ、うん。俺もリョータでいいよ。で、どうなのかな？」

そこから、どうして黒竜の娘であるわたしが学園に入ることになったかを説明した。途中で、黒竜のイメージが、とかパワーバランスが崩壊しちゃうなあなんていう声も聞こえたが、無視した。いろいろあったけど、わたしだって弟か妹が産まれるのは嬉しいのだ。

「了解。そんな理由なら仕方ない、多分。仕方ないよね？」

ラジさんとロウイさんは苦笑いしている。自分で言うのもなんだけど、黒竜の娘にいちやもんつけるのは、大自然にけんか売するようなものだ。人間が敵う相手ではないのだから、いいも悪いも無いのだろう。

「うーん、一応。黒竜の娘っていうのは伏せておこう。学園パニツクになっちゃうし。で、この際だから言っておくけど、自分が規格外な能力を持っているということをきちんと認識しておいてね。人間は集団になつたら怖いよ？」

きょんとした顔のわたしをみてリョータさんは、苦笑する。

「竜たちは強い。群れると言っても、ほとんど個人でも生きていくし、それで生きていけるくらい強いんだ。人間は弱い、でも力を合わせるということを知っている。集団になつてしまえば、人間程強

「生き物は居ない。」

半分人間とはいえ、基本は竜の世界で生きて来たわたしには少し難しい話だった。竜が群れることと、人間が集団で居ることに違いなんてあるんだろうか。

「まあ、困ったときはおいで。俺もまだ20ちょっと越えたくらいだから、まだまだ若造だけど。君よりは人間の世界で生きているからね。」

ぽふつと頭をなでくれる姿は、どこかお父さんに似ていて。きゅうつと胸が苦しくなる。親元を離れたのは人生で初めてで、ハクスイがいるといつても、両親のかわりにはならない。寂しいという未知なる感情を抱いたわたしは、咄嗟にリョータさんに抱きついた。危なげなくわたしを受け止めてくれたリョータさんは、驚いてはいるようだが、わたしを突き放したりはしない。その暖かさに涙が出そうになる。

「あの、リョータさん。」

「リョータでいいよ。」

「・・・ちよつとだけ、このままでいいですか。」

「俺の腕でよければどうぞ。」

ハクスイとミサキが固まり、ラジさんははしたないと叫んで、ロウイさんだけおかしそうに笑っていたけれど、わたしはリョータの腕の中でホームシックを癒していたので、何も見えなかった。

見なかったことにした。

13) 人という生き物は(後書き)

突然、心が不安定になることってありますよね。誰かに抱きしめてもらいたいような、泣きたいような、叫びだしたいような。そんなときに一人なのは可哀想なので、抱きつく相手を用意してみました(笑)

14) 宿をとろう

結局その日は、これからの注意事項を言われただけでわたしとハクスイは無罪放免ということになった。ただ、もしかしたら監視が付くかもしれないとリョータが苦笑いしながら言っていたので、手放しでは喜べない。

「ねえ、ハクスイ。竜と人間はそんなに遠い存在なのかな。」

騎士団本部を出て、石畳を踏みしめながら歩く。大きな通りから少しだけ離れたところだから、人は少ないらしいが、それでもたくさんの人が道を歩いている。

「そうね。アキには実感わかないだろうけど、わたしたちは希少種で、強大な存在なの。人間からしたら脅威なのよ。」

影の中から聞こえる声は、あっさりとしたものだった。

「そうかなあ……。」

うーんとしかめっ面をしていると、背中をぽんと小さな手が叩く。

「姫さまはそんなこと気にしなくても大丈夫ですよ。監視と言ってもそんなキツイものじゃないと思いますし。」

影の中からざわりと不穏な気配が立ち上ってくる。ハクスイ、と心の中でいさめるとちっとしたうちが聞こえる。

「なんでミサキがここにいいのかしらね。宿くらい自分たちで見つけられるわよ。」

イライラした声が聞こえて、となりの小さな竜がひつと息をのむ。

「もうハクスイ、つかからないで。ミサキくんはリョータに頼まれて来てくれたんだから。」

初めて王都にきたという話をリョータにしたら、ミサキくんをナイトとして貸してくれたのだ。ハクスイは自分がいるから大丈夫だと言ったけれど、団長の白竜として有名なミサキならともかく、誰と契約しているのか分からない白竜が王都をうろつくのは危険だ、とリョータに反対されてしまった。だからずっと機嫌が悪いのだが、なぜかリョータには逆らえないらしく、文句をいいながらも影の中でおとなしくしている。

「あ、姫様。あちらです！」

ぱたぱたと駆け出したミサキくんの前には「日溜まり亭」と書かれたこぢんまりした宿屋があった。

「ネーイさん、お客さん連れてきましたー。」

ドアを開けるとからんころんとカウベルが鳴り響き、奥の方からはあーいと女の人の声がする。

「はいはい。いらっしやいませー。」

カウンターに出て来たのは若い女の人だった。美人ではないけれど、くしゃっと笑った顔が可愛い。

「あら、ミサキくんじゃない。ということは、また不思議なお客さんなのかしら？」

くるんとした瞳がこちらをのぞいて来てぎくりとする。大きなハシバミ色の瞳はなんでも見通しているようで居心地が悪い。

「あの・・・？」

沈黙に耐えきれず、声をかけると、女性がふたつまばたきをする。

「ああ、ごめんなさいね。あなたは大丈夫そうだからいいわ。ええと・・・角部屋なら空いてるけど、どうします？」

「あ、お、お願いします！」

「はい。わかりました。ミサキくんの紹介だからあまり心配はしてないけど、部屋を破壊したり、隣人を襲ったりするのは止めてくださいね？」

このあたりちよつと変な人多いから、と女の方は笑っているけれど、ちよつと変な人が部屋まで壊してしまうんだろつか。

「大丈夫ですよ、ネーイさん。壊れたときは騎士団から保証が出ますから！」

「あらそうつ？」

「ミサキくん、わたし暴れたりしないから！」

不名誉な印象をつけられる前に、しっかりと訂正をしておく。あらあら、なんてお姉さんは笑っていたけれど、こっちとしてはあまり目立たずいいこうと思っているのだから、変な印象はつけておきたくないのだ。

「やだな、姫様。ちょっとした冗談ですよー。」

「ミサキくんが言うつと冗談に聞こえないのよ。」

「ええ、そんなあ。」

「うふふ、仲良しのねえ。」

「そうでもないですよー。」

「ええつ、ひどい!」

はい、これが鍵になります。と渡されたのは、銀色の大きめの鍵だった。うっかり騎士団に連行されたりしたけれど、そもそもこの王都に来たのは学園に入るためだったのだ。ようやくここからスタートだと思うと、不思議に気分が高揚してくる。

「じゃあ、僕はここで。」

ミサキ君が笑顔で手を振る。

「あ、うん。リョータによろしくね!」

慌ててこちらも手を振り返すと、来たときと同様に軽やかなベルを

鳴らしてミサキくんは出て行った。

「王都へようこそ、姫様。」

そんな歓迎の言葉をひとつ置いて。

14（宿をとろう）（後書き）

どこから謝りましょう。えっと、久しぶりすぎるところからいいですか？

わたしは生きています。元気ですよー。

ようやく、次回から学園編です。ようやくすぎる、本当に。冬越えちゃったし、もう。

こんな作者ですが、生暖かく見守ってやってください。またちよいちよいあげていきます。

幕間）前途は多難？

歩く床は硬く、革靴の底を押し返してくる。学生の証明書代わりでもあるローブは特Aクラスの証拠である漆黒の布で作られ、足下にまとわりつき、彼女の苛立をよりいっそう煽りたてた。

「特Aに転入生なんて馬鹿なことがある訳ないわ。どういふことなの！」

苛立たしげに口を開けば、いつも後ろを付いて回るAクラスの連中が小さく悲鳴を上げる。

「リート、何かあったのか？」

沸騰しそうな頭の中でも響く声は、彼女の想い人であり、この学園で唯一の理解者である少年のものだった。

「セリア様！・・・いえ、何でも無いんですの。ただ、ちょっと噂を聞きました。」

さつと手を出せば、そこにいくつかの書類が置かれる。そこには、寮へ空き室を用意すること、そして特Aクラスへ新しい生徒の受け入れ準備をするようにと記されている。

「荒唐無稽の噂ではありませんけど、特Aに転入生が来るなんて捨て置くには不穏なお話でしょう？」

引きつりそうになる口角を意識してあげていると、向こう側から同じ漆黒のローブをまとった少年が現れる。思わず舌打ちしそうにな

った彼女の気配を感じ、取り巻きたちは一步下がる。

「リイ嬢、朝からご機嫌麗しゅう。まるで鶏のごとく高らかな声がこちら側まで響いていたヨ。」

ひょうひょうとした少年は、大きめのローブをたくし上げ、手のひらに水で出来た画面を浮かび上がらせる。

「荒唐無稽の噂である転入生は、どうやら騎士団とのつながりもあるVIPなお嬢様らしいネ。ほうら、これを見てご覧。」

水の画面には騎士団からミサキを伴い出てくるアキの姿が会った。

「な！？この子が転入生だって言うのっ。」

「ほう。ひどく曖昧な魔力の持ち主だな。」

「セ、セリア様！？」

「セリア君にはわかるかぁ。そうなんだよ、属性が見えない不思議な魔力でしょうー？」

興味津々と言った体の少年たちをよそに、彼女は煮えくり返るような心地でいた。特Aクラスは、学園の中でもエリート中のエリートが在籍する場所で、学年すら存在しない完全な実力主義のクラスだ。炎の魔力が強かった彼女は、血のにじむような努力をして、ようやく特Aにあがることができた。3年もの歳月をかけ、やっと。それなのに、

「ただの小娘が特Aクラスなんて、わたしは絶対に認めない・・・

っ。
」

絞り出すような声でつぶやき、画面から視線を離す。これ以上画面を見れば、熱くたぎった炎で焼き尽くしてしまいそうだったから。

「セリア様。転入生のことが真実だと分かりましたので、わたくし歓迎の準備をして参りますわね。」

「え、ああ。」

「では。．．．いきますわよ、皆さん。」

ロープを翻す彼女は憤怒の炎に燃えていた。その後ろ姿を見送った少年たちは、双方ともに全く違った息を吐く。

「うつひゃー、怖いデスね。数少ない女子生徒が謎の失踪なんて、僕イヤです。」

「全く、お前はそれを狙っていたんだろう。」

「あれ、バレましたあ？」

嬉々とした表情で今後の成り行きを見守る少年と、呆れながらも止めようとはしない少年。

物事の当事者はそんなことも露知らず、学園への編入手続きを行っていた。

「はつくしゅー！」

「アキ、どうしたの。風邪？」

「違うよ。なんだろう、変な感じ。あ、ハクスイそっちの書類とって。」

「はあい。」

彼女の前途は多難なのであった。

幕間）前途は多難？（後書き）

前途は多難ですよ。転入生が虐められない訳が無いもの
↑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4138p/>

黒竜の愛娘

2011年4月9日22時41分発行